

フロアからの声

人・生き物・大地が呼吸する空間を取り戻す復興事業を

矢野 智徳

(杜の学校 大地の再生技術研究所)

様々な復興の現場を見せてもらったことがありますが、基本的にコンクリートで「赤道（あかみち）」「青道（あおみち）」の動線整備が、設備とともに作られていると思います。昔の治水土木のあり方を振り返り、復興事業の現場で、コンクリートを含めた脈の動線整備を、もう一度大地とつながったもの、大地を介して空気と水が循環し、人と生き物が呼吸できるこの大地とさらに大地の下も含めた循環系を作ることを考えていただければと思っています。日本全国で、とりわけ被災地の復興事業の中で、この大地の下の血管のような脈の機能、空気と水が循環して、人・生き物・そして大地も呼吸できる空間づくりの取組みの方向性が生まれると、ヒートアイランドの問題を含めて、人も大地も呼吸できる循環が機能する現場

が戻ってくるということを、みなさんの発表を伺いながら痛感しました。

注)

赤道（あかみち）：道路法の適用のない法定外公共物である道路のこと。従前の公図（及び公図作成前の字限図）において赤い線で表示されていたことから、赤線と名づけられた。赤道（あかみち、あかどう）、赤地（あかち）または里道（りどう）とも称される。

青道（あおみち）：公共の用に供されている普通河川、小河川や水路、ため池であって、河川法、下水道法などの法令で管理が規定されている一級河川、二級河川、準用河川および雨水管渠以外のものを言う。[法定外公共物 - Wikipedia](#) (2024/2/12 検索)

総括コメント

山川 充夫 先生

(福島大学名誉教授、福島大学うつくしま
ふくしま未来支援センター初代センター長)

私はもともと中学校か高校の地理の先生になろうと思って愛知教育大学に入りました。その一年次の教養演習（現在のゼミに相当）で、和辻哲郎の風土論を読むことになりました。哲学的には難しいのですが、地理をやっている者にはそれがなぜかスーッと入ってきた不思議な感覚を今ももっています。

その後自分自身がどう批判的に理解していくかということを考えていました。経済地理学の分野では、マルクス経済学の分野からこれを批判している人がいました。ビダル・ド・ラ・ラブラーシュという人が、風土とは何かを生活様式論という観点から再構築すべきと主張していましたが、きち

んと批判できたのかということがずっと疑問に残っていました。

先日、日本災害復興学会で関西学院大学の先生が和辻哲郎の風土論について面白い批判をしていました。基本的に気象・気候の問題で風土論を展開した和辻は、自身は関東大震災を経験しているにもかかわらず、その話は一切風土論に出てこない。和辻の風土論の批判としては、和辻は最終的には人間関係のあり方—人民論—というところで、静態的な面から、秩序としておさめようという精神のもとで構築されてきて、結果的に第二次世界大戦に突入していくときの日本の精神風土を創り上げてしまった。それをどう批判的に反省し